

先週は、イエス様がヨハネから洗礼を受けられたことを記念する礼拝でした。今日の福音書は、イエス様が洗礼を受けられた翌日とまたその翌日、ヨハネの活動している近くを通りかかり、二日目には、ヨハネの弟子の二人が、イエス様の弟子になるために付いていったというお話です。ふたりのうちの一人は、アンデレでした。アンデレは、他の福音書ではガリラヤ湖で魚をとっていたのですが、このヨハネによる福音書では、洗礼者ヨハネの弟子ということになっています。そしてこのアンデレが、自分の兄弟シモン・ペトロにイエス様との出会いを語るところで終わっています。

このお話から、学ぶところがたくさんありますが、今日は、洗礼者ヨハネがイエス様について説明した言葉。一日目は「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。」二日目は「見よ、神の小羊だ」と、同じようなことを言っている、その意味を考えたいと思います。

「小羊」という言葉には、旧約聖書以来、いろんな意味がありますが、その中のひとつは、「過ぎ越しの小羊」というイメージです。「過ぎ越しの小羊」が、どんなものであるか、皆さんは、映画などで見た覚えはありませんか。イエス様が生まれるより1300年くらい前、イスラエルの民族は、エジプトで、奴隷の身分でした。神様は、その民族の先祖、アブラハムに約束されたことを果たすため、400年間エジプトに住み、奴隷の身分になってしまった御自分の民イスラエルを、約束の地カナンに住めるように、モーセを使ってエジプトを脱出させます。その前の晩、神様は、エジプト中の最初に生まれた子どもを一人残らず滅ぼす、という災害をもたらされました。しかし、イスラエル民族には、その災害が及ばないように、各家庭では小羊を殺して、その血を家の戸口の柱に塗るように、あらかじめ命じられたのです。神様は、その血を塗られた家は通り過ぎて行かれたので、イスラエル人の家は安全でした。そして、自由の土地を目指して旅立ったわけです。そこで、現在までずっと、イスラエルの人々は、春になると、この出来事を記念して、過ぎ越しの祭りを祝っています。

不思議なことに、イエス様は、イスラエルの人々が過ぎ越しのお祭りをする前の日、エルサレムで十字架にかけられました。このヨハネによる福音書を見てゆくと、イエス様が十字架の上で、死なれたのは、金曜日の午後三時頃なんです。それはちょうど過ぎ越しの祭りのために、エルサレムの神殿で、祭司が小羊を殺す時刻でした。そして、処刑の後で、兵士がイエス様の足を折らなかったということも、過ぎ越しの小羊を思い起こさせます。なぜなら、過ぎ越しの小羊の骨は、折ってはならない、と決められているからです。

ちょうど、イスラエルの人々が、エジプトという奴隷の状態から自由になるために、小羊がささげられたように、イエス様が、御自分の命を十字架の上で、ささげられたことによって、人類の罪が赦され、私たちは自由になった、というのが、イエス様が、世の罪を取り除く神の小羊である、ということの根拠なのです。

それでは、イエス様が取り除かれた、「世の罪」とは、何のことなのでしょう。これは、旧約聖書の最初にまでさかのぼることなのですが、最初の人間、アダムとエバが、神様から離れて、自分が神様のようになろうとした、その罪に原因していると思います。

この人間の思い上がりは、やがて、ノアの洪水の後、バベルの塔が建設されますが、その時に、塔を建てる材料などにも、人間の罪が現れているように思えます。塔を建てる人々は、石のかわりにれんが、しっくいのかわりにアスファルトというふうに、自然のものではなく、人間に都合よく造ったもので、建設します。ところが、工事は途中で中止されてしまいました。人々が、お互いの言葉を理解できなくなったからです。

神様と人間の関係が壊れると、人間同士も、関係が壊れて行くのだ、と聖書を書いた人々は言いたいのです。

さて、イスラエルの先祖アブラハムが、羊飼いをしていた頃、メソポタミアとエジプトは、どちらも古代の文明が栄えた国でした。メソポタミアには、バベルの塔のモデルだろうと言われるジグラッドという塔が建っていましたし、エジプトにも、ピラミッドがありました。ピラミッドのことを「金字塔」と言うのは、皆さんご存知でしょう。漢字の「金」という字に似ている塔だというわけですね。

でも、神様は、この人間文明をお嫌いになりました。そこでは、神様が忘れられるだけではなく、人間が人間を支配し、奴隷として扱ってしまう。これは、ある意味で、文明の進んだ現代の先進国にも見られることではないでしょうか。

自分の利益のために、親や子、兄弟を利用し、都合が悪くなれば殺してしまう。そんな勝手な生き方が、奴隷生活をしているイスラエルの人々が住んでいたエジプトにもあったのです。そんな人間の文明に背を向けて、神様を中心にして、人間同士が尊重しあえる生活にかかわること、これが、モーセの十戒に書かれている内容です。

でも、そのためには、神様が具体的に、人間のために、人間を愛するために、犠牲さえ払えるような、そんな生き方を人々に示す必要があった。そして、神様は人間を愛するゆえに、罪のない者が身代わりになる、という生き方を示されたのではないかと私は思うのです。イエス様が架けられた十字架は、私たちひとりひとりに、「人間は自分の幸福のために生きるのではなく、他人の幸福のために、生きるんだ。」ということを態度で示された。「互いに重荷を担い合いなさい」ということだろうと思います。

しかし、神様と人間、また人間と人間の和解のために、十字架に架かって、犠牲になるというのは、理解しにくい。わたしたちはイエス様の犠牲と私たちの生活をどのように結びつけたらいいのでしょうか。

これは、ひとつのたとえですが、考えてみてください。

皆さんは免疫血清というものをご存知でしょうか。沖縄などへ行くと、ハブという毒を持った蛇がいて、これに噛まれると、血清というものを注射して、毒を中和して、安全になるということです。

私は、詳しくないのですが、聞きかじりの話をします。ハブ対策の血清をどうやって作るのか。健康な馬に、毒を微量ずつ定期的に注射し、毒に対して免疫（抗体）ができるまで約半年続けます。馬の体内に十分な抗体が産出されるようになると、その馬の血液を全て取り出します。その血液の中から有効成分（抗体）を精製し、乾燥させて保存します。有効性と安全性のテストの後、病院などに配布され治療用に使われます。馬1頭から約300本の抗毒素がとれます。

可愛そうに、その馬は死んでしまうのでしょうか。

それと同じようにして、イエス様は、私たちの代わりに、自己中心という罪、悪魔と戦い、十字架の上で殺された、と考えてみてください。そして、そのイエス様は、殺される前の晩、最後の晩餐の時、「私の肉を食べ、私の血の杯を飲みなさい。」と言われました。

私たちは、自分では、自己中心という罪、悪魔に立ち向かう力はありません。いつも、いろんな誘惑に負けて、落ち込んでしまうことが多いのです。それは、ちょうど、ハブに噛まれて、身動きがとれなくなるような、命の危険に出くわしているようなものではないでしょうか。しかし、私たちのために、先ず、悪魔であるハブの毒素と戦ったイエス様は、血清である、聖餐を私たちに残してくださった、と考えたらどうでしょうか。そうすると、わたしたちは、悪魔にいつも汚染されていても、聖餐をいただくことで、立ち直ることができる、というふうには考えられないでしょうか。

もっと言えば、イエス様が戦ってくださった犠牲によって、危険に遭う前に、聖餐という予防接種を受けている。だから、少々の誘惑や、危険があっても、私たちの中に居てくださるイエス様によって、これからの歩みも守られている。

イエス様は私たちを弱らせ、倒すような、多くの世の罪を、私たちより前に、体全体に受けて、死ぬことによって、取り除いてくださった。免疫を作って、私たちが死なずに、歩めるようにしてくださった。

この神の小羊に感謝し、聖餐を喜んで受ける者でありたいと思うのです。

クリスマスの時、よく言うメッセージですが、「恐れるな、インマヌエル。神様がいつも私たちと共に居てくださる。」それを感謝して、歩むものでありたいと思います。